

子宮内膜症および卵巣嚢腫に対する各種細径腹腔鏡下手術の有用性

湯口 裕子、 齊藤奈津穂、 奥田喜代司
(北摂総合病院 産婦人科)

【目的】：

より低侵襲、整容性を目指した reduced (number or size) port surgery の一つである細径腹腔鏡下手術を子宮内膜症と卵巣嚢腫の症例で行い、その有用性を検討した。

【方法】：

2009年11月から2012年10月までの子宮内膜症51例、卵巣嚢腫22例を対象とし、細径腹腔鏡下手術(5mm径のカメラポート、5mm径の鉗子用ポート(外径8mm)、Mini-Lap(外径2.3mm)×2本か、3mm径の鉗子用ポート(外径3.5mm)×2本)を行い、従来法(10mm径のカメラポート、5mm径の鉗子用ポート×3本)による腹腔鏡下手術と年齢、手術時間、術後のCRP値、鎮痛剤の使用回数に関して比較検討した。

【成績】：

Mini-Lapを使用した子宮内膜症の16例中2例で、卵管などの癒着が強いため5mm鉗子に変更した。子宮内膜症において、従来法(18例)とMini-Lap使用細径法(14例)、3mmポート使用細径法(17例)とのr-ASRM、嚢胞径は差がなかった、術後のCRP値は従来法と比較して細径法(Mini-Lap, 3mmポート)で有意に低下していた。術後の鎮痛剤使用回数はMini-Lap使用細径法が、従来法、3mmポート使用細径法と比較して有意に低かった。手術時間は、Mini-Lap使用細径法が、他と比較して有意に延長していた。一方、卵巣嚢腫では、細径法と従来法とに術後CRP値や鎮痛剤使用回数、手術時間に有意差は認めなかった。創部はMiniLap法、2.7mm鉗子、5mm鉗子の順に短く、整容的に優れていると考えられた。

【結論】：

子宮内膜症症例では5mm径のカメラポート、Mini-Lapや3mm鉗子による細径腹腔鏡下手術は低侵襲で、整容性に優れていると考えられたが、卵巣嚢腫では腫瘍摘出が8mm創からは困難なことが多いためその有用性は明らかではなかった。